

第5回 講義ノート 教師の仕事と多忙観

学校の教師という仕事は、多数の子どもの成長に関わることができ、また自分でいろいろな工夫もできる自由度の大きい仕事で、やりがいのある職だと思います。

しかし、最近教師の多忙やバーンアウト（燃え尽き症候群）が問題になっています。今回は、その現状や原因を考えてみたいと思います。

第1に、小学校教師の一日を見てください（授業資料5-1）。朝の「登校指導」から始まって、「朝の会」「授業」「中休み」「授業」「給食指導」「昼休み」「清掃指導」「授業」「帰りの会」「放課後」と、全く休みなく、気を抜く暇もありません。

教師の仕事として、学習指導（授業）、生活指導、学級経営、学校行事、部活指導、職員会議、公務分掌、保護者対応、研修等とさまざま仕事・業務があり、最近ではデジタル機器も導入されていますので、その準備も必要です。その仕事・業務の多さと多忙を、具体的にみてください。

第2に、日本の教師の多忙は、他の国の教師と比較してどうでしょうか。教師というのはどこの国でも多忙なのでしょう。

経済協力開発機構（OECD）の国際比較調査で、日本の教師は「授業外」の仕事に追われ、きわめて多忙になっていることがわかります（授業資料5-2）

私はアメリカの小学校の様子を少し観察したことがありますが、教員の仕事は授業をやるのが主で、休み時間は、子どもたちが校庭に出ることを奨励し、そこでは子どもたちの遊びを見守る人がいます。昼食は、皆食堂で食べますが、ランチを買うこともでき、食堂で子どもたちが食べる様子を見守る人がいます（教師ではない）。放課後のクラブ活動はほとんどなく、そのような活動は地域で行われています。カウンセラーも常駐していて、子どもの心理的ケアは、担任ではなくカウンセラーが行います。このように、アメリカでは教師の仕事は、授業が主で、その他の仕事は、他の専門の人が行っているのを感じました。

第3に、最近話題になっていることですが、文部科学省が教員を目指す若者たちに仕事の魅力を伝えるため、教員たちにSNSでの発信を呼びかけた「#教師のバトン」プロジェクトがあります。それをめぐっては、当初の想定を超えて過酷な勤務環境を訴える声が多数書き込まれているとのこと（授業資料5-3）。

<グローバル Web アイコン “教師のバトン” 想定を超える悲痛な声 | 教育 | NHK ニュース <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210408/k...>>

その実際を、上記の新聞記事や「#教師のバトン」のツイッターで見て下さい。

第4に、なぜ、教師はこのように多忙なのでしょう。

もちろん、教師に課せられた業務が多すぎるといえることがあると思います。それに関しては、今文部科学省も教師の働き方改革をすすめています。教師自身の働き方や心情に問題はないのでしょうか。

教育社会学者の本田由紀は、「自己実現系ワークホリック」「奉仕性」という言葉で、教師の働き過ぎを説明しています。

それは教師だけでなく、バイク便ライダーやコンビニ店長やヘルパーや看護師に共通するものと指摘しています。（授業資料5-4）

「子どもの為になるのなら、どれだけの時間や労力を費やしても惜しくない。やればやるほど、子どもは喜び、子どもの為になる」という「奉仕性」「自己実現系ワークホリック」を、あなたはどのように思いますか。

最近、オリンピックのボランティアに、その「奉仕性」に期待し、交通費も自己負担で、それを宣伝する電通には多額の宣伝費を払うということが問題になっていますが、「奉仕性」(ボランティア)というのは、気を付けなければいけない面があります。

第5に、授業資料5-5で、教師のメンタルヘルスの現状と対策を読み取ってください。

学校現場を覆う多能さと教師の孤立が説明されています。対策として管理職等によってなされるものと個人が行うセルフケアが説明されています。

以上の5つの授業資料を読んで、日本の教師の置かれた多忙の現実を、しっかり認識してください。

甘い気持ちで教師になって後悔したり、バーンアウトしてしまうことのないようにしてください。

今回の課題は、下記です。

「日本の教員はなぜ多忙なのでしょう。教員の多忙に関してどのように考えますか。どのような対策をとればいいのでしょうか」

解答(コメント)は200字~1000字程度で、KCNの「課題提出」の欄を通して、(武内)に送ってください。

(欄の中に書き込んでも、別にワードで書き、それを添付して送っていただいても結構です)